

朝日山地におけるオオハンゴンソウ防除について

朝日庄内森林生態系保全センター	発 表 者	主 事	工藤 柊也
	チームリーダー	主任主事	南澤 望
	アドバイザー	所 長	中嶋 一

1 はじめに

当センターでは朝日山地森林生態系保護地域内の保護及び巡視を中心に業務を行っています。今回は、業務の一環として行ってきた特定外来生物のオオハンゴンソウの調査及び防除活動について紹介します。

オオハンゴンソウとは

オオハンゴンソウ（図1）とは北米原産のキク科の多年生草本であり、明治中期に観賞用として日本に導入されたものが逸出したとされ、現在は全国各地に生育しています。このオオハンゴンソウは特定外来生物に指定されており、繁殖力が強く生態系に大きな影響をもたらします。そのため全国各地で駆除活動が行われているのが現状です。



図1 オオハンゴンソウ

また、オオハンゴンソウは開花していれば認識は容易ですが、開花前はヨモギと区別が付きにくいです。見分け方として、ヨモギの葉の裏（図2）は灰白色をしています。オオハンゴンソウ（図3）は灰白色ではありません。また、匂いにも違いがありヨモギは独特な香りがしますがオオハンゴンソウは青臭い匂いがするので区別がつけられます。



図2 ヨモギ



図3 オオハンゴンソウ

2 取組内容

朝日山地森林生態系保護地域内の朝日町朝日岳外 49 国有林 29 林班ち小班内林道脇（図 4）にて平成 29 年にオオハンゴンソウが確認されてから生息拡大を防ぐために関係機関の協力を得て防除作業を行ってきましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により全体での防除作業が実施できなかった令和 2 年からは防除作業の効率化及び有効性を確認するために四つの取り組みを行いました。

（1）プロット調査

その一つ目として、防除作業の効率性を高める目的で一般的に行われる処理方法を比較したプロット調査を行いました。地上のみを刈払い機等で処理する地上部処理区、根から全て掘り取りを行う根茎処理区、比較対象として何も行わない無処理区の三つのプロットを 5 月と 9 月に調査を行い、比較しました。

（2）根茎処理調査

二つ目の取り組みは、令和 3 年から令和 5 年にかけてオオハンゴンソウの根茎処理の抑制状況を調査しました。調査方法は春季に根茎処理を行い（図 5）、翌年に発生した株の調査を行います。

（3）照度調査

三つ目の取り組みは、令和 2 年から令和 5 年にかけて照度調査を行い、日向と日陰による生長比較を行いました。照度計測は直接太陽光が当たる箇所を上部とし、地上 30 cm の箇所を下部として設定し計測しました。

（4）労力軽減効果

四つ目の取り組みは、これまでの関係機関との防除作業から出た問題点である労力軽減



図 4 オオハンゴンソウ生息地



図 5 オオハンゴンソウ根茎処理

についての課題解決にも取り組みました。これまでは花を見てオオハングンソウを確認していたため、開花する7月から8月頃関係機関と防除活動を行ってきました。開花時期の気温は30°以上になり、繁茂している藪の中から大小さまざまなオオハングンソウの株を探して掘り取る作業は熱中症の危険性も高く、非常に困難でした。また、株が生長しているため掘り取りにも時間がかかります。以上の課題を解決するため、季節を夏季から春季に変えて掘り取りを行い、労力の軽減を図ることとしました。

3 結果

(1) プロット調査

地上部処理区は株数の減少がみられました。しかし、根元まで除去していないため、株の再生数が多く、茎数が大きく増加していました(図6)。この結果から、地上部処理で一時的に生長を抑制できるが、根絶は不可能であることが確認されました。

根茎処理区は株数の大幅な減少がみられました。日向日陰ともに2本生育している株は調査開始前に生育していた箇所からの発生であったことから根を完全に除去できていなかったため発生したと考えられます。

無処理区は日向プロットでは株数の増加がみられました。茎数の増加はないものの草丈が著しく成長していました(図7)。日陰プロットでは枯死した株が多く減少していますが、茎数が大幅に増加していました。また、枯死した株の種子が生長し来年度以降増加すると予測できます。

以上の結果から、根からの掘り取りを行う根茎処理の有効性を改めて確認できました。

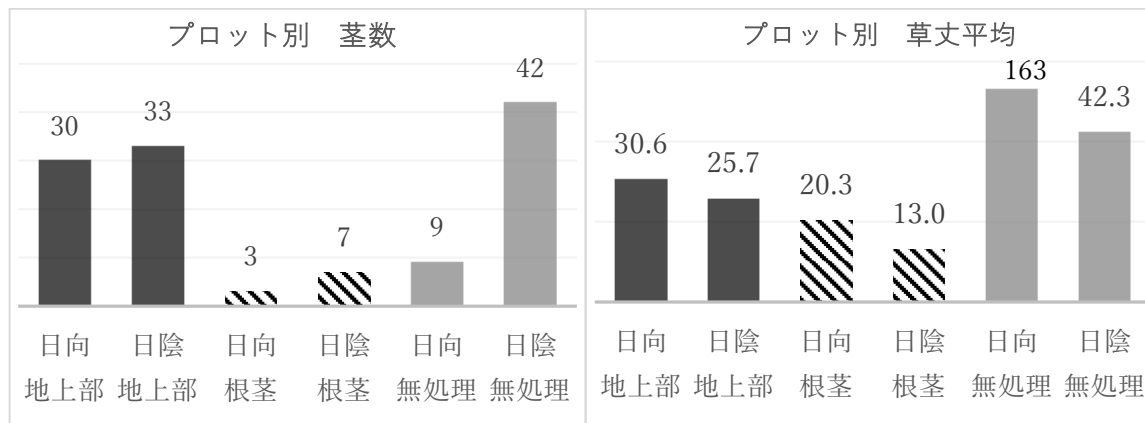


図 6 茎数

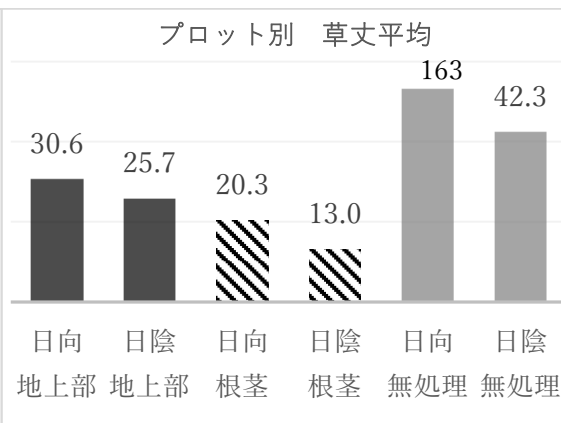


図 7 草丈平均

(2) 根茎処理調査

令和2年のプロット調査の場所を引き継いで行ったため令和3年の株数に差がありますが、令和4年以降はどのプロットも大幅に減少していることがわかります(図8)。草丈も一定の高さに抑制できていることがわかります(図9)。このことから継続的な作業を行うことで効果が現れるということがわかりました。

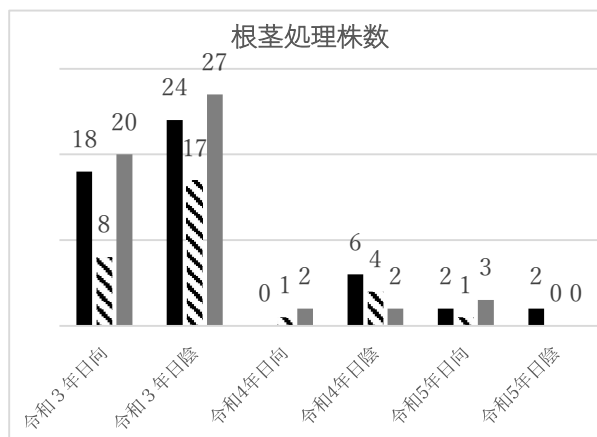


図 8 株数

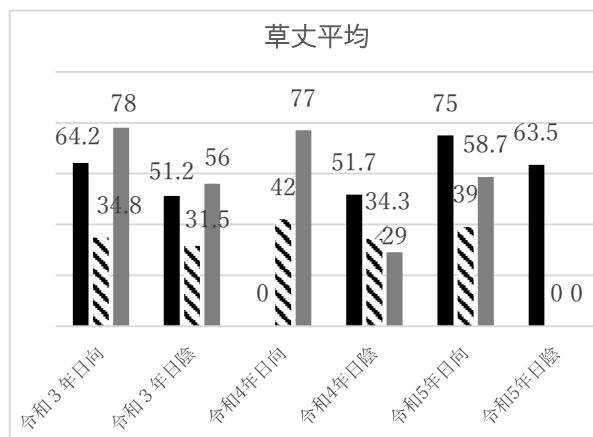


図 9 草丈平均

(3) 照度調査

照度計測の結果（図 9、10）と取組 1 の草丈平均（図 7）の結果を比較したところ今回の試験地では照度の差による生長への影響はあまり見られませんでした。日向日陰問わず種子や根が残っていれば照度に関係なく発芽することがわかりました。

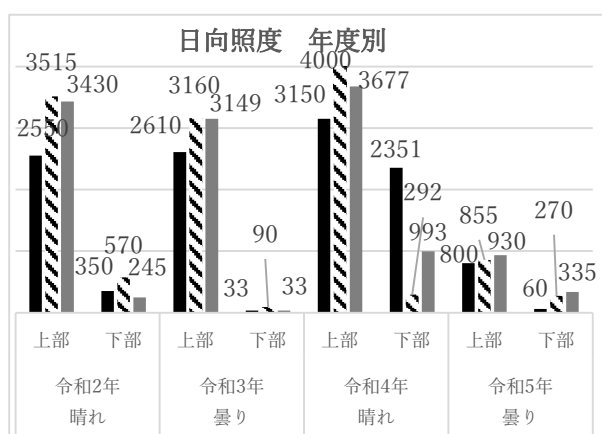


図 9 日向照度

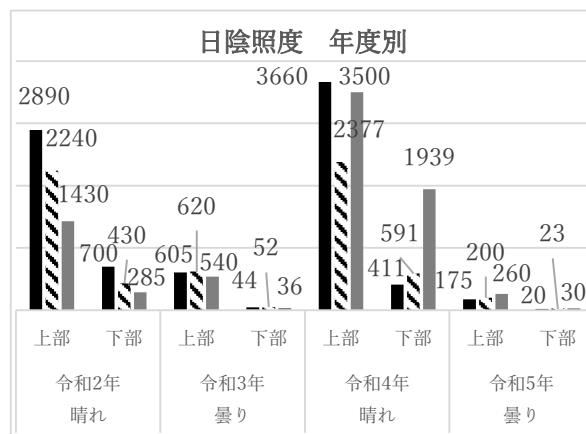


図 10 日陰照度

(4) 労力軽減効果

春季に防除作業を行ったことでのメリットとして熱中症のリスクが少ない、オオハングソンソウが開花前であるため種子による飛散を防ぎながら作業を行える、オオハングソンソウ及びその他草本類が生長しきる前に作業を行うため株が小さく効率的に行えるなどが挙げられました（図 11、12）。



図 11 夏季繁茂状況



図 12 春季繁茂状況

4 結論

処理方法として根元から全て抜き取る根茎処理が最も抑制効果があることが改めて確認することができました。根元が完全に取り切れていない物や埋土種子によって発芽したものと推測されるため根絶には至りませんでした。継続的に作業を行うことで効果がみられました。オオハンゴンソウは照度の違いに関係なく生長できることがわかりました。これまでの防除作業の課題であった熱中症対策や株の肥大化による作業効率の低下を春季に防除を実施することで課題解決することができました。

5 おわりに

今回の取り組みでこれまでの防除作業の効果を確認し、防除作業の効率化を図れました。年々減少傾向にありますが、オオハンゴンソウに特効薬はありません。根絶は容易ではありませんが、引き続き朝日山地森林生態系保護地域内での増殖を防ぐため尽力していきます。また、この場をお借りして防除活動にご協力いただいた関係機関の方々に御礼申し上げます。

6 参考文献

環境省 日本の外来種対策 特定外来生物の解説

<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/list/L-syo-03.html>